

生涯教育月報

2022

春

季刊 No.128



流水に佇む水海の王者オオワシ

評議員会・理事会および論文入賞者表彰式	2
研究助成金授与式	4
伝統文化「狂言」に親しむ	6
情熱の踊り「フラメンコ」に親しむ	8
プロフィール・インタビュー 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 コミュニティ人間科学科 准教授 本庄 陽子さん	12





評議員会・理事会および論文入賞者表彰式



コロナ禍から学び、新たな時代を生きる



あいさつをする
城 真二常務理事

2021年11月12日、The Okura Tokyoにて評議員会および理事会が通常通り対面形式で行われました。評議員会では、第48期決算および第49期予算が報告され、すべて承認されました。また、理事会において北野七重氏が専務理事として選任され可決されました。

その後、会場を移し論文入賞者表彰式および研究助成金授与式がそれぞれリモート（ハイブリッド）形式で行われました。冒頭、財団を代表して城真二常務理事が次のようにあいさつしました。

「新型コロナウイルスの感染拡大の中、例年通り論文募集を実施できたことを大変嬉しく思います。

論文募集は今年で43回目となります。「継続は力なり」を実践している、財団の主要事業です。今年の課題は「コロナ禍から学ぶ」でした。まさに的を射た課題であると思う一方で、課題を議論した21年1月時点で、現在までコロナ禍が継続するなどは誰が考えたでしょうか。図らずも、私たちの日常は激変を余儀なくされ、その影響は人々の意識や価値観にも及ぼうとしています。私たちは新型コロナウイルスとの共存を考えねばなりません。

ません。この状況下でも、当財団は「いつでも、どこでも、だれでも学べる」をモットーに、その生涯にわたって学びの機会を提供してまいります。」

論文入賞者表彰式

続いて、第43回懸賞論文入賞者の表彰式が行われました。今回のテーマは「コロナ禍から学ぶ」。全国から405編が集まり、18編が入賞しました。

第1席「コロナ禍が開けた扉」



石井 泰子さん
(東京都・主婦)

早朝散歩の最中、楮（こうぞ）の若木に出会い、遠い記憶が蘇りました。職人魂に日がつき、染色の知識をパソコンで調べ、四季折々の草木を摘んで染色に明け暮れる日々。自然の猛威を、自然の力・草木染めで乗り越えました。

第2席「春のよすが」



吉村 可奈子さん
(佐賀県・高校生)

初めての高校生活は休校からスタートしました。単調な日々を送る中、遠足に出かけた先で、健気に咲く雑草やこれまで見過ごしてきた景色に心惹かれ、頭の中の何がほどけ、視野が広がりました。

第2席「生き直すということ」



森 理恵さん
(東京都・高等学校教員)

心折れそうな日々の中、家族のぬくもり・友人との絆・生徒との共感の全てが自分の生をつむぐかけがえのない存在だと気づき、生きていることの切なさや愛しさに満たされまし

た。何度でも自分の生を確かめ、「生き直す」ということが、人が生きるといことです。

第3席「ウィズ・コロナ・ウィズ・チルドレン」非常事態の中の「恩送り」



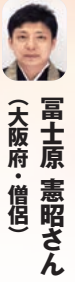
渡辺 悠樹さん
(山形県・ライター)

東北の小さな町にコロナ陽性者が出て、講師をしていた塾も全ての授業が休講になりました。子供たちの孤独感を和らげるためにオンライン学習室を開設し、地域の子供たちも利用できるよう連帯の輪を広げていきました。恩を返していくことの大切さを、新型コロナウイルスが教えてくれました。



論文入賞者表彰式リモート開催の様子

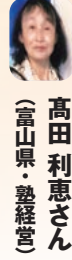
第3席「不安のアラームを聞くために」



富士原 憲昭さん
(大阪府・信侶)

不安障害の妻を支える日々を、コロナ禍が襲いました。負担はさらに増し、苛立ちが募ることもある中で、コロナ感染者の話を書く機会がありました。「不安だから嫌なことをしてしまうのだろう。相手の気持ちも分かる気がする。」予想もしなかった考えに、相手側に立って景色を見ることの大切さを教えられました。

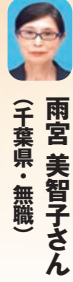
第3席「もつすぐ私は歩けなくなるのに！」



高田 利恵さん
(富山県・塾経営)

私は進行性麻痺の病を抱えています。歩けるうちにと楽しみにしていた海外旅行をコロナ禍が奪った一方で、良い変化もありました。今が苦しいからこそ、それを乗り越えた先の期待は高まると考えます。

第3席「家族の歴史と向き合う」



兩宮 美智子さん
(千葉県・無職)

親族の法要をまとめて執り行うことになり、一族の歴史を記録した冊子を作ることになりました。完成した冊子は三部構成で100ページに及びます。先祖を敬い慈しむ気持ちを家系図に込め、法事の引き出物として配りました。



後列左から城 真二常務理事、小松 章論文審査委員、前列左から北野 七重専務理事、第1席 石井 泰子さん、耳塚 寛明論文審査委員長



青山学院大学 学部特任教授
耳塚 寛明

講評

新しい世界・新しい自分に出会う

入賞を果たされた皆さん、本日はおめでとうございます。約50倍という狭き門をくぐり抜けてのご入賞につきまして、心から敬意をお伝えしたいと思います。

今年の論文テーマを「コロナ禍から学ぶ」に決定したのは21年の暮れに発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に世界中で猛威を振るうようになり、その広がり方からグローバル化を強く体感しました。テーマ決定の会議はその真つ只中のことであり、「コロナ禍から学ぶ」というテーマはごく自然に賛同を集めた記憶があります。

ただ、当時は感染者数増加の一途をたどっていくとは予想できませんでした。不安の大きい状況のなかで書かれた各論文が放っている緊張感や臨場感は、そのぶん大きなものになっているように思いま

す。新型コロナウィルス感染症は大きな脅威である一方、だからこそ気づかされたものがあります。感染拡大は、見えなかったものを見せてくれる壮大な社会実験でもあり、個人や社会が目を開き学ぶ、非常に大きな契機であったと感じます。

では何が見えてきたのでしょうか。石井泰子さんは、これまで住んだことのない世界への扉が開かれたことの喜びを語っています。吉村可奈子さんが発見したのは、道端に咲く雑草の美しさでした。渡辺悠樹さんが見たのは、他人のために動ける人間かどうかでふるいにかげられた世界です。コロナ禍の中で未知の世界が開かれ新しい気づきが生まれたのだと思います。また、見えてきたのは外の世界の新しい風景だけではありません。森理恵さんは「生き直す」ことの中で自分の生を確かめ、「生き直し続けること」が人が生きることなのだと言っています。富士原憲昭さんは相手の立場になって考えることの重要性を再認識したと書いています。兩宮美智子さんはご家族の歴史の冊子づくりを通して一族や家族の再発見をしたと言います。そして、見えてきたのは外在する新しい世界ばかりではありません。眼差しが内側へと向かい、自身や家族の姿、その信ずる価値など、目には見えないものが見えるようになりました。高田利恵さんは「もつすぐ私は歩けなくなるのに！」の中で、再び自由な世界が訪れたとき、その喜びはつらかった分だけより深くより大きくなるだろうと書かれています。そうであることを私も信じたいと

思います。吉田弥生さんは、コロナ禍を生きた日常世界に戻るのではありません。新しい世界と新しい自分が見えるようになるのです。皆さんの作品を読み感じたのはこのことです。そのときが訪れることを願ってやみません。ありがとうございます。

コロナ禍が明けたあと、私たちは元いた日常世界に戻るのではありません。新しい世界と新しい自分が見えるようになるのです。皆さんの作品を読み感じたのはこのことです。そのときが訪れることを願ってやみません。ありがとうございます。

〈私の生涯教育実践シリーズ '21〉

『コロナ禍から学ぶ』

1,000円

ぎょうせい刊

ご希望の方は財団事務局までどうぞ。



研究助成金 授与式

生涯にわたる
学びのために



研究助成金授与式

続いて、生涯教育に関連する調査、研究を支援するための研究助成金の授与式が行われました。今回は給付した10名全員が出席し城常務理事のあいさつの後、一人ひとり研究題目と概要を、資料を共有しながら発表しました。

「新人保育士の生涯学習を促すための保育研修プログラムの開発」



山下 雅佳実さん
(中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 講師)

ケアを必要とする子どもたちが年々増える一方で、新人保育士の離職率は高く、それが保育志望者の減少につながるという悪循環に陥っています。本研究では、生涯学習の観点から新人保育士を対象とした研修プログラムの開発・実践を通じて、新人保育士のキャリア形成を図ります。

「都市祭礼の伝承活動を通じた生涯教育」
「保存会・学校・博物館・住民の連携によるとりくみの意義と今後の可能性」



武田 俊輔さん
(法政大学社会学部 教授)

地域での生涯学習がどのような機能や意義を持っているのかを、滋賀県長浜

市の祭礼を例に明らかにしていきます。3世代が役割を分担する構造、またその知識を若い世代へ継承する方法、および今後の展望を考察します。

「岡山自主夜間中学における学び直しの
数学教材の構成」



河合 伸昭さん
(一般社団法人
岡山自主夜間中学)

現在の高校では、テストによる競争原理を用いて、理解することより慣れることを促す教育が行われています。これを改善するために、「グラフ電卓」を用いて、一人ひとりが理解し納得しながら学んでいける、ストーリー性のある教材を作成します。

「遠隔地の高齢者と都市部の大学生が地域課題を解決するオンライン・プログラムの開発」



西川 ハンナさん
(創価大学文学部 准教授)

少子高齢化により顕在化している人口格差と、それに伴って起こる地域課題に着目し、長野のシニア大学生と都市部の大学生21名が参加するオンラインスタディツアーを実施しました。IT技術を用いて、遠隔地での共助の構築を模索し、課題解決プログラムを開発します。

「来日外国人少年の少年院仮退院者に対する継続的学習機会の提供に関する研究」



鮎川 潤さん
(愛知文教女子短期大学
幼児教育学科 講師)

少年院で学校教育を受けた外国人少年の進歩は著しいですが、退院後にそれが生かされているとは言い難いのが現状です。生涯教育へとつなげていける体制を確立するため、更生保護施設などにおける外国人少年の調査を行います。

「新しい博物館教育論にもとづくデジタル学習支援法の開発と評価」



高橋 満さん
(放送大学
宮城学習センター 所長)

来館者が博物館経験を通してどう学習しているのか、そのプロセスを解明します。従来の知識伝達型の教育から、博物館の来館経験を通じて意味を構成する教育へと転換するための、効果的な学習支援の方法を模索します。

「知財戦略策定に主体的に参画する技術者・研究者を育成するための
知財生涯教育プログラムの構築」



戸次 一夫さん
(東北大学法学研究科 教授)

理系研究者は、特許などの知的財産権

の取得に際して、うまく権利化できず市場に失敗してしまうことがあります。そこで、研究者自身が知財戦略を意識して事業に参加できるようなプログラムを考案します。

「地域社会において大学が果たす役割に関する研究」生涯学習機能に着目して」



寺田 悠希さん
(東京大学 博士課程)

少子高齢化が進むに従って、生涯学習時代が訪れると言われています。その中で、大学の主要なステークホルダーが若年層から地域住民へと移り変わると考えられます。そこで、地域住民や自治体が大学にどんな役割を期待するのかを説明します。

「価値が多様化する社会における公共図書館の役割」多文化・多民族地域における公共図書館サービスの事例分析」



鈴木 一生さん
(筑波大学大学院
図書館情報メディア研究科博士課程)

移民の増加を背景に、彼らの社会的包摂を促す機関として公共図書館の役割が注目されています。価値観の統合と個性の尊重という二つのイデオロギーがあることを前提として、日本と米国の多文化社会において図書館が提

供するサービスの理論と実態を説明します。

「生涯学習としての韓国語教育におけるブレンド型オンライン授業の試み」



金 銀珠さん
(北海道情報大学 准教授)

学習意欲は年齢・性別による差がないと言われる一方で、大学の公開講座の受講者は若年女性の割合が低くなっています。ブレンド型オンライン授業を韓国語教育に取り入れることで、さまざまな人が参加しやすい教育の場を模索します。

講評

つながり、 広がる生涯教育を



放送大学長
岩永 雅也

大変興味深く拝聴させていただきました。まず選考のプロセスを振り返りますと、皆さんよく考えられた研究プロジェクトばかりで、なかなかその中から該当するものを選び抜くのは大変な作業でした。一方、本日発表を伺いまして、やはり適切な方々を選んだなとしみじみと思いました。私は放送大学にも30数年奉職しておりますが、当初は生涯学習といえは自分の教養を高めるための自己完結的・自己目的的な個人の学習が多かったと感じております。一方で、皆さんの発表を伺いますと、地域や社会など、他者とのつながりに注目して研究を進めていくという方向性が感

じられました。博物館や図書館、法を研究なさる中で、そこから見えてくる社会や他者、地域やコミュニティが念頭に置かれており、生涯教育が成熟するにつれ「つながり」に向かつていくのだと感じました。北野財団のご厚意で提供されているこの資金を用いて、生涯学習のつながりと広がりやを常に念頭に置きながら研究を進めていただければと思います。

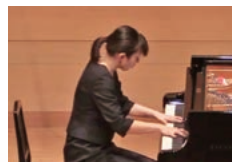
「生涯学習における」という言葉を最初につければ全て生涯学習になる、というわけではありません。生涯学習がどういうものかということや常に念頭におき、議論や研究を進めていただければ幸いです。



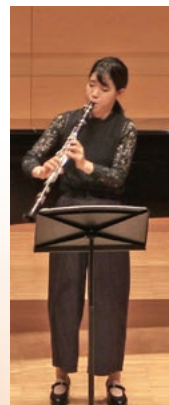
研究助成金授与式リモート開催の様子

音楽奨学生演奏

恒例となっている音楽奨学生の披露演奏は、それぞれ表彰式・授与式の最後に、事前に録画された素晴らしい演奏を視聴し、楽しみました。また期間限定でWEB上でも公開しました。



力強く素早い指の動きで皆を魅了。伊藤 春菜さん



響き渡るクラリネットの音色。林 まり恵さん



素晴らしい歌声を披露
東原 由貴さん

伝統文化

「狂言」に親しむ



講師 石田 幸雄氏 重要無形文化財総合指定者

6月12日(土)、めぐろパーシモンホール小ホールにて万作の会・石田幸雄氏ほか2名を講師に招き、所作体験と鑑賞を含む、狂言の入門講座が開かれました。

この辺りの
ものでござる

演者が黙って、橋掛りを進んでいきます。本舞台に入り正面を向き前進、そして止まると一歩下がってから、「このあたりのものでござる」と発声します。多くの狂言がこの独特の自己紹介から始まります。

狂言は、橋掛りと三間(約5.5メートル)四方の舞台で繰り広げられる、演者の声と身体だけであらゆる物事を表現する古典芸能です。能も同じ舞台で行われます。狂言と能は(舞台が親として)、性格が違ふ兄弟みたいなものです。能は謡と舞で、物語にあるような悲劇、恋愛にまつわる苦悩といったものが演じられます。狂言



太郎冠者(たろうかじゃ)の装束を着ける実演をいただきました。まるで楽屋に居るようです。



装束付けとその構成などを解説いただきました。

は、人間の弱さや欲を、日常やバカバカしい出来事を題材に、様式的に演じる台詞劇です。音が欲しいときは、演者が声で擬音を出します。余計なことは一切しない、肝心な表現だけを演じてみせるのが狂言です。

また、演者が「目黒を出発した」と言ってから、舞台の上を「回りし」「いや、何かといううちに札幌に着いた」と言う時、もうそこは札幌なのです。そして舞台を一回りするともまた目黒に戻ってくることもできます。観客は想像し感じ取り、一体感で舞台を作っていくことができます。慣れれば慣れるほど癖になる、楽しくなるのが狂言です。

狂言「鐘の音」の鑑賞

岡聡史氏、内藤連氏により狂言「鐘の音」が演じられました。



鐘の音の上演

主人は息子の元服に、黄金作りの太刀を差させてやろうと考え、金の値段を聞きに太郎冠者を鎌倉へ遣わします。ところが、「金の値」を、寺の「鐘の音」と思い込んだ太郎冠者。寺々を回って帰宅すると、主人の前で鐘の音を説明するのだが……というのがあらすじです。

寿福寺・円覚寺・極楽寺・建長寺の寺々の鐘の音を擬音で説明したり、主人の怒りを解くため、鐘の音の子細を誂い舞ったりするのが見どころの狂言です。演者自身の声で鐘の音を表現する、狂言独自の趣向をライブならではの迫力と感動で堪能しました。



鐘の音の鐘を突く所作と鐘の擬音を体験しました。感染予防のため、着席のまま行いました。両手を左右にふり、「えい、えい、えい」と鐘を突く動作をし、鐘

「鐘の音」と狂言 小舞「兎」を体験



内藤 連氏が演じる「太郎冠者」



岡 聡史氏が演じる「主」



所作体験 客席にて えい、えい、えいっ (鐘を突く動作)

の音を「じゃーん、もん、もん、もん、もーん」と声で表現します。参加者の皆さんは、最初は恥ずかしがっていましたが、だんだんと乗ってきて、良いビブラートがかかるようになりました。その後、「兎」を皆で舞いました。

小舞「兎(うさぎ)」
あ(ん)の山から こ(ん)の山へ
跳んできたるは何じやるろ
頭(かしら)に二つ ふつぶつと
細うて 長うて
びんど跳ねたを
ちやつと推した
兎ちゃ



所作体験 ずか、ずかずかずか (のこざりて垣根を切る様子)



所作とともに謡うのですが、そこに感情を入れた、狂言の「心」を体験しました。狂言の深さと面白さを知ることができました。

今回の講演会最後に笑いの所作をしました。「まず、まず、まず、わーはっ、はっ、はー」と。なぜだかすきっとほのぼのとした気持ちになりました。今の暗い世の中に、明るい日が差したようなひと時を過ごすことができました。石田幸雄講師、万作の会の皆さんに改めてお礼申し上げます。



所作体験 わーはっ、はっ、はー

次回以降も伝統芸能・狂言や舞台芸術などで皆様に喜ばれるような企画をしてみたいです。

※本文の一部について、講演会当日に使用した石田幸雄講師監修のレジュメから引用しています。



深い悲しみの中に美しさと力強さを表現する小松原先生



サパテアード（足踏み）と
ファルダ（スカート）の美しい動き



立ち姿も美しいフラメンコの衣装

情熱の踊り 「フラメンコ」に親しむ

9月4日（土）、めぐろパーシモンホール小ホールにて、日本のフラメンコ界第一人者・小松原庸子スペイン舞踊団を講師に招き、フラメンコの歴史・文化を学び、楽器演奏や歌、踊りを観る講演会を開催しました。

魂の叫び フラメンコ

フラメンコはスペイン南部のアンダルシア地方で生まれた民族舞踊です。もともとはインドを起源とするジプシー（スペイン語でヒターノ）が、安住の地を求めて長い放浪生活の末に辿りついたのがアンダルシア地方だったのです。ジプシーの生まれ持つ感性や音楽と、アンダルシアに古くから伝わる音楽が見事に融合して生まれたのがフラメンコなのです。ですから、はじめは踊りではなく歌（カンテ）だといわれています。カンテはジプシーの喜びや悲しみ、嘆き、想い、希望など魂の叫びなのです。

ユネスコ世界 無形文化遺産

互いの掛け合いからリズムが生まれ、それに合わせて男も女も踊りだし、パルマ



力強いサパテアード（足踏み）が観客を惹きつける



シグリージャを踊る小松原先生と男性舞踊家

（手拍子）を叩き、さらにギターが合わさり、今のフラメンコの形ができあがりしました。その後、タブラオ（飲食しながらフラメンコ鑑賞ができるステージのある飲食店）が数多くでき、発展してきました。2010年には「ユネスコ世界無形文化遺産」に登録されるなどフラメンコは世界中で愛され続けています。日本では女性の習い事としても大変人気があり、フラメンコ愛好者はスペインに次いで多いといわれています。今では踊りだけでなく、ギターやカンテも大変人気があります。

ここは スペインの タブラオ!?

舞台奥からパルマ（手拍子）、カホン（打楽器）の響きが聞こえ、ギターの音色とともにフラメンコの幕が開きました。カンタオールによる深い響きのある歌に会場は一気に引き込まれ、まるでスペインのタブラオにいるかのような雰囲気となりました。



会場を瞬でスペインのタブラオにする
ギターとカホンの音色



深く響き渡る声で
ジプシーの喜びや悲しみを歌うカンタオール



スペイン・セビージャに春を告げるセビリヤナス

スペイン・セビージャに春を告げる4月の
祭り(フェリア・
デアプリル)。
街中がフラメン
コに染まりま
す。明るいリズ
ムと華やかな
衣装、軽快なパ
リージョ(カス
タネット)によ
るセビリヤナス
で、皆さんも自
然と笑顔が溢
れました。

響き渡る パリージョと サパテアード

小松原先生と男性舞踊家によるレク
チャーでは、リズムを刻む先生の素晴らし
いパリージョの音と舞踊家の軽快なサパテ



観客を魅了する先生と
男性舞踊家によるバイレ

アード(足踏み)に、皆さん目を見張つてい
ました。



勇壮に闘う闘牛士の姿が
目に浮かぶ

フラメンコに 魅了される

曲に合わせて衣装を着替え、扇子(アバ
ニコ)や大きなショール(マントン)、帽子(コ
ルドベスハット)を使うなど、パリージョだ
けではない初めて触れるフラメンコの世界
にすっかり魅了されていました。



扇子(アバニコ)と長い裾を
美しく魅せて舞うカラコロス



大きなショール(マントン)が印象的な踊り



「私の帽子に聞いてごらん」と明るく楽しく踊る

コロナ禍のおり、舞台上での体験は叶い
ませんでしたが、席に座ったまま小松原
先生の指導のもと、演奏に合わせて全員
でパルマを叩き、フィナーレはステージと
客席がひとつの大きなタブラオになり、大
変盛り上がりました。皆さんからは「と

ても楽しかった」「本当に素晴らしかった」
「元気をもらった」など多くの声をいた
だき、『心踊る』講演会になりました。



全員でパルマ(手拍子)を叩き
大盛り上がりのフィナーレ



小松原先生による
パルマ(手拍子)のご指導

用語解説

カンテ：歌(深く響く声の特徴)

- カンタオール(男性の歌い手)
- カンタオーラ(女性の歌い手)

バイレ：舞踊

- (床を踏み鳴らし踊る。手の動きに特徴がある。)
- バイラオール(男性の踊り手)
- バイラオーラ(女性の踊り手)

パルマ：手拍子

- (高い音と低い音を叩き方によって使い分ける)

サパテアード：足踏み(靴底の音でリズムを響かせる)

ご報告



アウトリーチプログラムへの協賛

当財団では、公益財団法人 目黒区芸術文化振興財団が主催している「アウトリーチプログラム」に協賛しています。この事業は、目黒区内の小中学校にプロのアーティスト（音楽家、ピアニスト）を派遣し、生の演奏を観て・聴いて、感じて、芸術文化に触れて一緒に楽しむことを目的としています。より近くで音の響きを感じてもらうため、通常は音楽室で行うことが多いのですが、コロナ禍のおり感染対策をしっかり施したうえで体育館での開催となりました。素晴らしい演奏を聴いた子どもたちに、明るい笑顔が溢れました。



感情を込めて歌いあげる演奏家

フィリピン・ミンダナオ子ども図書館(MCCL)

ソーラーパネルを設置

当財団では、「ミンダナオ子ども図書館(MCCL)」が行っている保育所建設の費用を助成しています。



保育所の屋根にソーラーパネルを設置

2021年は保育所の屋根にソーラーパネルを設置しました。子どもたちはこれまで以上に勉学に励むことでしょう。財団は今後も新たな保育所建設や修繕費の助成を通して、子どもたちに学ぶ機会を与える活動を行っていきます。

支援物資を送付

毎年恒例となっている、「ミンダナオ子ども図書館(MCCL)」への支援物資の寄付も、昨年9月で11年目となりました。みなさまからの善意のおかげで、衣料品やぬいぐるみ、タオル、シート、リュックサック、運動靴など、今年も多くの物資が集まりました。

子どもたちに素敵なクリスマスプレゼントを届けることができました。



みなさまの優しさが詰まった贈り物



プレゼントを抱えうれしそうなお子様たち

彫刻奨学生の作品設置

コロナ禍により遅れていた2020年度彫刻奨学生の作品設置が、11月16日山梨県笛吹市にある「藤笠の滝 大窪いやしの杜公園」内で行われました。これまでに寄贈された彫刻は86体にな

り、笛吹市民の芸術文化振興に役立てられています。



ドリルで自ら穴を開ける奨学生

目黒区より「図書寄贈」への感謝状受領

当財団が行っている小・中学校への図書寄贈に対して、1月18日、目黒区から感謝状を授与されました。当財団では2010年から毎年、目黒区内の小・中学生の心の糧になるように、と多くの図書を寄贈しています。これからも子どもたちの学びのきっかけになるよう図書寄贈を続けてまいります。



関根教育長(右)から感謝状を授与される城 真二常務理事

お知らせ



第44回 事実に基づく小論文・エッセー募集 迷ったときの決断

人は、誰もが迷いながら生きています。日常のほんの小さなことから、人生を変えてしまうような大きなことまで、自分自身で考え決断しながら生きていきます。いや、これは自分自身で決断したわけではない、誰かにそうさせられたのだ、親の意見を聞いたから今に至っているのだ、と言いたい人がいるかもしれません。しかし人の意見に従ったり流されたりしたことも、それを受け入れたのは、結局は自分自身の決断です。

この2年間、「新型コロナウイルス」という未知の脅威に振り回されました。ワクチン接種を受けるべきか否か、帰省や旅行、会食やイベントを控えるべきか否か等、これまでには無い決断を迫られました。

しかし人生は、長い目でみると進学、就職、転職、結婚、転居、引退など実に多くの場面で迷いと決断の連続です。その決断が本当に正解なのか誰にもわかりません。苦しくもがいていた日々、どのような想いでその決断をしたのか。あるいは決断できなかったのか。人それぞれにいろいろな形での決断があり、

そこに様々な学びがあるはず。時が経てば正解だったと言える日が来ることも、正解だと思っていたのに実は失敗だったということもあるでしょう。今、この瞬間にも苦悩し自問自答している人は少なくないと思います。先行き不透明なこの時代に、今まで通りではない新しい「決断」が必要なのではないでしょうか。

これまでの人生においてあなたの「決断」を語ってください。その決断が正解だったのか間違っていたのか。そこから何を学び、何を失ったのか。ご自身の経験を綴ってください。

応募規定 縦書き400字詰め
原稿用紙8枚〜10枚

締切 2022年5月10日(火)

賞金

1席(1編) 賞状・副賞50万円
2席(3編) 賞状・副賞20万円
3席(5編) 賞状・副賞5万円
佳作(10編) 賞状・副賞3万円

入賞発表 2022年9月初旬

表彰式 2022年11月11日(金)

会場 The OkuraTokyo
(ホテルオークラ東京)

奨学生募集

「学習意欲のある社会人を応援」

奨学対象

・科目等履修生(学生を除く)

・放送大学大学院修士全科目生および選科履修生(ただし28歳以上または実務経験3年以上)
申込者の中から書類選考のうえ奨学生を決定します。なお奨学金は給付で返済不要です。

締切 2022年5月9日(月)

科目等履修奨学生

奨学金 年間20万円
定員 15名程度

放送大学大学院修士全科奨学生
奨学金 30万円(各年度15万円)
定員 10名程度

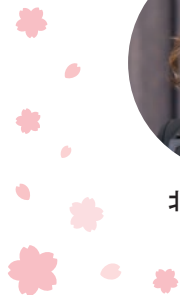
放送大学大学院選科履修奨学生
奨学金 年間7万円
定員 15名程度

新任専務理事ご紹介

財団活動の充実を図るため、ご協力いただくことになりました。



北野 七重さん



表紙ギャラリー

当財団は、『出会いがドラマ、感動する心を大切に』というスローガンのもと、出会いを大切に、様々な学び機会を提供してきました。人との出会いだけではなく、城や神社仏閣などの歴史的建造物や長い歴史に育まれた美しい原風景との出会いからも学ぶことは多いのではないかと考え、『世界遺産』を財団機関紙でご紹介します。

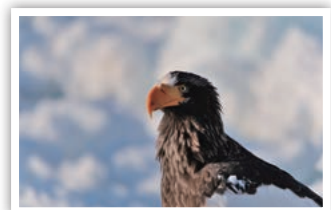
知床(北海道)

知床は、北海道の東部に位置し中央部に高く険しい山々が連なるオホーツク海に突き出た半島です。平成17年7月17日に日本で3番目の世界自然遺産として登録されました。登録にあたっては「知床の雄大な自然美」が登録理由と思われるのですが、じつはそうではなく「特異な生態系が見られること」と「多くの希少種が含まれており、世界的に重要な生物多様性地域であること」が登録基準となっています。

知床沿岸部は、世界でも最低緯度(南)にある海水(流水)のできる海域であることから、流水を起点とした世界でも大変珍しい海洋生態系と陸上生態系による複合生態系を形成しています。流水によってもたらされる豊富なプランクトンを求めて多くの魚が集まり、それらを食べるアザラシやトドがその恩恵を受けにやってきます。また、豊かな海で育ったサケは川を遡上し、それを捕食するヒグマは人の手が加えられていない奥深い豊かな自然の中に生息して

います。やがて彼らは土となり森を育てます。このように知床では、海から川、そして陸、森へと繋がる特異な生態系を見ることが出来ます。

知床は絶滅危惧種のシマフクロウの生息地であり、流水と共にやってくる国の天然記念物でもあるオオワシやオジロワシなど国際的希少種の重要な繁殖地や越冬地となっています。厳しい寒さの中、流水に佇む彼らの鋭い眼光の先には、暖かい春そして明るい未来が待っていることでしょう。この類まれなかけがえのない自然という財産を、後世まで引き継いでいかなければなりません。



流水に佇む氷海の王者オオワシ(知床・北海道)

こ・ち・ら・編 集 室

1年ぶりの『生涯教育だより』となりました。この2年間、財団では様々な事業が延期または中止を余儀なくされました。今年こそと思っていた矢先、感染が急拡大となってしまい、歴史研修「城めぐり」も中止という苦渋の決断をいたしました。残念でなりません。コロナ禍によって人々の働き方や暮らしは大きく変わり、これまでは無かった決断を迫られています。財団が毎年行っている「事実に基づく小論文・エッセー募集」の今年の課題は「迷ったときの決断」です。ぜひ、みなさまの経験した「決断」をお寄せください。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第128号

2022年3月10日発行

編集人 城 真二

発行人 北野 重子

発行所 公益財団法人 北野生涯教育振興会

〒153-0053 東京都目黒区五本木1丁目12番16号

電話 東京 03(3711)1111



青山学院大学
コミュニティ人間科学部 コミュニティ人間科学科 准教授

本庄 陽子さん

YOKO HONJO

人は学びから力を得る 一歩ずつでも前進を

2020年4月から当財団の奨学金選考委員会の選考委員長を務めていただいている本庄さん。ご自身の経歴をもとに、生涯学習に対するお考えをお話しいただきました。

—本庄さんのご経歴と、現在の主な研究内容についてお聞かせください。

高校卒業後、大学へは行かずに社会人になりました。結婚・出産を経て子育てが落ち着いてきたところに「大学に行ってみるのもおもしろいかも」と思い、社会人入試を受けて2002年4月に清泉女子大学に入学しました。

4年生のときに、恩師となる鈴木眞理教授(現 青山学院大学教授)とのご縁があり、当時鈴木教授がおられた東京大学の大学院に行くことを勧められました。受験勉強にはかなり苦労しましたし、無理だと



ミラノのホテル、朝食バイキングのテーブルで写した写真。きれいに並んでいるスプーンからも、イタリア人の食事を楽しむ姿勢が伝わってきます

—北野財団との関わり、選考委員長をお務めいただくことになった経緯についてお聞かせください。

北野財団の審査委員長を務めておられた青山学院大学の耳塚寛明教授に推薦していただいたことがきっかけです。突然のことだったので驚きましたが、ぜひお役に立ちたいと思いました。私自身、人生の半分を過ごしたころに大学に入った人間です。生涯学習は私自身が実践していることです。

—北野財団との関わり、選考委員長をお務めいただくことになった経緯についてお聞かせください。

北野財団の審査委員長を務めておられた青山学院大学の耳塚寛明教授に推薦していただいたことがきっかけです。突然のことだったので驚きましたが、ぜひお役に立ちたいと思いました。私自身、人生の半分を過ごしたころに大学に入った人間です。生涯学習は私自身が実践していることです。

実は、以前に祐天寺にある北野財団の近くに住んでいたことがあり、元々財団のことは知っていました。鈴木教授から「生涯教育のサポートを始めた財団はこちらが最初だ」と聞かされたときは驚きました。優れた活動をしている団体はたくさんあり



—生涯教育に対するお考えをお聞かせください。

社会人となつてからも学びへの意欲を持つている方は少なくありません。私の場合は、子育てが一段落して人生の後半をどう過ごすか考えたときに、大学に行けば方向性が見えてくるのではないかと思って入学を決意しました。学ぶことへの動機は人それぞれだと思います。ふわっとしたものだとしても、一歩踏み出すと視界が開けたり、新たな気づきがあったりするものです。

いざ学び始めると、何か違うな、これは自分やりたかったことではないな、と感じることもあるかもしれません。社会人が学び直す際に若い人と違うのは、やり直しがきく時間が短いことです。社会人学生には真面目な人が多く、始めたからには最後までやり遂げなければ、と考えがちです。その考え方がモチベーションになるのであればよいのですが、自分で自分を苦しめることにもなりかねません。もっと気楽に考えて、違うと感じるのであれば立ち止まる、方向

—「趣味、余暇の過ごし方を教えてください。

「趣味は何ですか?」と質問されると、私は昔から「留守番と昼寝です」とお答えしています(笑)。家で一人、家族の帰りを待っているのがとても幸せな時間です。あとは料理が好きで、料理教室に通ったり、アシスタントを務めたりしたこともありました。

—読者へのメッセージをお願いします。

今の仕事をしていて楽しいのが、学生の成長を見られることです。学びを重ねるにつれ、若者たちはどんどん変わっていきます。知ることは、とても大きな力を人に与えます。社会人の方々は学生ほど劇的な変化はないのかもしれませんが、それでも学びから得られるものは計り知れません。すぐに自身の成長を感じられないとしても、1年前、数年前の自分と比べればきっと前進しています。できることから少しずつでも挑戦していただけたらうれしく思います。

「生涯教育の意義を身を持って感じている」と話される本庄さん。当財団の活動が、より多くの方の学習の充実につながるよう、今後「ご指導をよろしくお願いたします。」